発行日　2004年8月20日（隔月20日発行）通巻240号　1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター　会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

# Trial & Error

No.240
September-October 2004

特集

## NGOってなんだろう
### ー 農村編 ー

〈スタッフのひとりごと〉
## アディオス、カラムーチョ！

〈サブ特集〉
## 中東からの報告

〈カンボジア、タイ、ラオス、ベトナム〉 農村でのひとこま

JVC Japan International Volunteer Center

特集

# NGOってなんだろう

## 農村編

お金やモノが足りないなら、それをあげればいいんじゃないの？

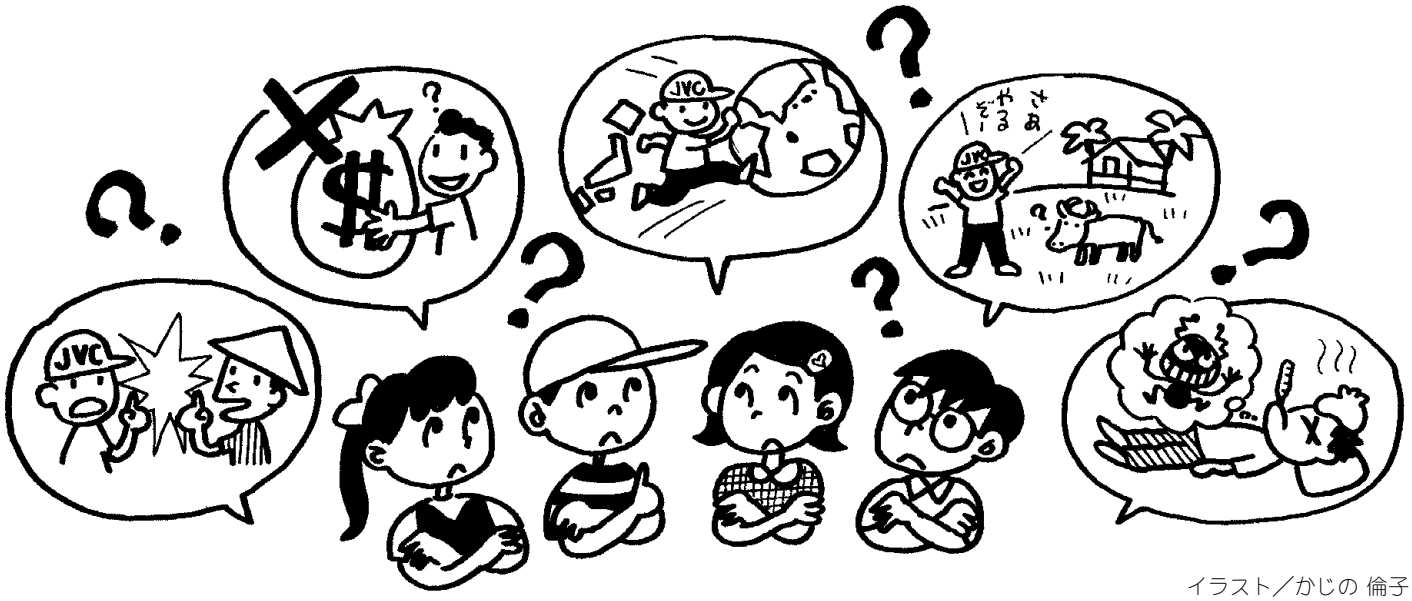
なんで外国の村まで出かけていくの？

「NGOって何なのだろう」「国際協力なんて言って外国の村まで行って、いったい何をしたいのだろう」――いまさら何を、なんて言わないでください。たまには、そんな根源的な問いを自身に発してみて、考えて見るのも面白いものです。それも抽象的ではなく具体的に。そこで、農村での活動に対象を絞って、JVCをよく訪れる小・中学生がよく発する率直な質問を5つ選んで、JVCの現場でがんばっている若いスタッフに、自分の言葉で自分の考えを率直に語ってもらいました。JVCの公的見解ではない、本音の対話をつくりだしたいと考えたからです。さぁ、あなたにとって、NGOってなんですか？（編集部）

意見がぶつかったらどうするの？

どんなことをしてるの？

どうやって村の人と仲良くなるの？




イラスト／かじの 倫子

# 質問 1

「なんで外国の村まで出かけていくの？　日本のなかにも、生活が大変な人たちや、自殺やいじめとかの問題がたくさんあるのに…」

「外国の村の問題が、実は日本とつながっていることもあるんだ。また、世界的な規模の問題に立ち向かうためには、国を越えて人びとが協力する必要があるんだ」

僕は、高校生の時にタイの農村に旅行に行ったときに、人間の命を直接支えている食べ物をつくり出す農業の大切さと面白さを感じました。今は、東南アジアのラオスという国にいて、これから家庭菜園の普及や壊れた井戸の修復などの活動をする予定です。

ラオスは日本からは遠いところにありますが、ラオスで、ラオスの抱えている問題に対して働くことは、日本で、日本の抱えている問題に対して働くことと、同じように大事なことだと思っています。

というのも、ラオスなどの「途上国」と呼ばれる国々と日本とは、見えないところで深くつながっていて、それらの国々の人びとが抱える問題は、僕たち日本人の問題でもあるからです（カンボジアを例にとったわかりやすい説明が、5ページにあります）。

ですから、遠いラオスで活動していても、その先に日本の社会や自分の暮らしのことを常に考えるようにしています。でも、日本の抱えている自殺とかいじめの問題は、ラオスではあまり聞きません。ラオスと比べて日本ではどうしてそういう問題が起こるのか、逆に何か学べることはないのか考えていくことも大事なことだと思います。

また、僕は人びとが安心して暮らしていく上で、農業のあり方（目的や方法など）がとても重要だと思っています。農村社会の暮らしは、長い時間をかけてそれぞれの土地の風土に合わせて形づくられてきた大切なものです。

今、世界的な規模で進んでいる経済の大規模化（「グローバリゼーション」と呼ばれています）は、農業のあり方に大きな変化をもたらしています。その変化とは、農業を、農村に暮らす人たちが安心して暮らしていくためのものではなく、大きな会社が利益を得るための手段として利用しようとするものです。そしてそれは、それまでの農業のあり方や農村社会の暮らし、環境への影響を無視したかたちで進められがちなのです。そして、農村に暮らす人たちは、そういったことに関する情報を充分に得ることは難しいので、彼らだけでこれに対抗することは難しいのです。

農村に暮らす人たちが安定した農業を続けていけるように、民間の人たち同士が国境を越えて協力してネットワークをつくり、必要な情報や技術を共有して活動していくことが大切なことだと思っています。

答えた人

田坂 直之（たさか なおゆき）
ラオス事務所・
カムアンプロジェクト担当

東京の多摩ニュータウンで育ちました。28歳です。結婚して1年半になります。子どもはまだいません。小学校の時の夢は、山奥の学校の先生になることでした。畑仕事が大好きです。太鼓をたたいたり、旅をすることも好きです。今まで、小笠原諸島や北海道、福島、インドなどに住んできました。日本でも外国でも、それぞれの土地と結びついた暮らしや、そこに生きる人びとに心ひかれてきました。どこにいても、自分の目と手の届く小さな暮らしをすることを目指しています。

# 質問2

「外国の村では、JVCはどんなことをしてるの？
行く村はどうやって決めるの？」

「村の人たちがより暮らしやすくなるための方法を一緒に考えて、それに向かって一緒に工夫しているんだ。また、『自分たちで頑張ろう』としている人がいる村を優先して応援！」

私たちが活動しているカンボジアは自然に恵まれ、多くの人が農業や漁業をして生活していますが、その様子は日本での生活とはだいぶ違います。例えば、カンボジアの村には電気も水道もガスもほとんどありません。みなさんの家や学校にはいくつ蛇口があるでしょうか？　日本ではいつでもどこでも水を使えますが、カンボジアでは遠くの池まで水を汲みに行かなくてはなりません。料理をするのにもガスがないので、火を使うためには薪を自分たちで集めなくてはなりません。そこで私たちは、村の人がきれいな水を使えるように井戸掘りを支援したり、薪にするための木を植える活動などを支援したりしています。

また、カンボジアの村では、ほとんどの人が農業をしていて、食べるものを自分たちでつくらなくてはなりません。しかし、雨が少ない年には米や野菜がほとんど収穫できないこともあります。そこで私たちは、どうしたら充分な食べ物を常に確保できるのか、もっと良い農業のやり方はないのかということを村の人と一緒に考えて実践しています。

さらに、私たちは「コメ銀行」という活動を支援しています。「コメ銀行」では、その年に米をあまり収穫できなかった人が米を借りることができます。借りた人は次の年に米を収穫できたら返します。農業は自然が相手ですので、必ずしも毎年同じように米を収穫できるわけではありません。しかし、「コメ銀行」があることによってたくさん収穫できた人と残念ながらそうではなかった人が協力して助け合うことができます。もし、助け合う人がいなかったら、米を収穫できなかった人は借金をしたり土地や財産を売ったりして食べるものを買わなくてはいけません。そうすると、多くの人が家や土地などを失ってしまうことになります。

このように私たちは、村の人が協力して自分たちで生活を改善できるように支援しています。なぜならば、将来どのような村にしたいのかということは、村の人が自分たちで決めなくてはならないからです。せっかく日本の人が支援してくれたとしても、村の人が望んでいることと違う生活になってしまったら、村の人は幸せにはなれないでしょう。ですから私たちは自分たちの目標を実現するために頑張ろうとしている村を優先的に支援しています。

# 質問3

「でも、村の人たちは、自分たちのことなんだから自分たちでやらなきゃいけないんじゃないの？　お金やモノが足りないなら、それをあげればいいんじゃないの？」

「外国の村の問題の原因がそこの村人自身にないとしたら、それは村人だけでは解決できないよね。原因が他の国にあることだってある。お金やモノをだけをあげても、そこの暮らしや環境が良くなるとはかぎらないんだ」

もちろん自分たちのことは自分たちでやらなくてはなりません。ただ、カンボジアの村で起こっている問題はすべてカンボジアの人びとで解決できるわけではありません。例えば、最近、カンボジアでは木がどんどん切られて森が少なくなってきています。木を切ってしまうと洪水が発生したり、雨が降らなくなって干ばつになったりすることが知られています。洪水になると家や畑の農作物が流されてしまいます。また、干ばつになるとコメや野菜を作ることができなくなってしまいます。

さて、これはカンボジアの農民だけの問題でしょうか？　カンボジアで切られた木は一体どこへ行くのでしょうか？　実はその多くは日本などに木材や紙の原料などとして輸出されているのです。みなさんが住んでいる家や使っている家具、鉛筆やノートもひょっとするとカンボジアで切られた木からできているかもしれません。ですから、みなさんがそれらのものを粗末にすれば、ますますカンボジアの木は切られ、農民の生活は苦しくなります。

では、私たちは何をすればいいのでしょうか？　カンボジアの農民が米を食べられないのであれば、米をあげたり、米を買うためのお金をあげたりすれば問題は解決するでしょうか？　どんどんカンボジアの木が切られ、いつか木が無くなって砂漠のようになってしまったらどうでしょうか？　みなさん砂漠を想像してみてください。米を炊くための水はどこにありますか？　米を買うお店はどこにありますか？　これでは、問題は解決しません。

そこで、私たちはカンボジアの人びとと協力して問題に取り組まなくてはいけません。カンボジアの森が失われないように木を植えたり、カンボジアの人びとがきれいな水を使えるように井戸を掘ったりしながら、その一方で、日本人である私たちが、毎日の生活で自然資源を無駄遣いしていないかどうかを見直し、カンボジアの森がなくならないように生活していくためにはどうすればよいのかを考えなくてはなりません。確かにカンボジアには食べ物も充分にはなく厳しい生活を強いられている人がたくさんいます。しかし、こうした人びとを「助けてあげる」だけでは問題は解決しません。私たち自身の生活を振り返りながら「一緒に考える」ということが大切なのです。

答えた人

山﨑 勝（やまざき　まさる）
カンボジア事務所・農村開発担当


「食」は生命の基本であり、農業は人間の根本的な営（いとな）みであると考え、それを通じて様々な人に触れてみたいと農業や農村に関われる仕事を選びました。以来、4年間カンボジアでNGO活動を続けてきましたが、仕事を始めたばかりのころの「人びとのために」という想いは、徐々に「人びとと共に」という気持ちに変わってきました。今、カンボジアの人びとと共に暮らしながら、カンボジアから日本社会が学べることが多いと感じています。これからも様々な人びとと語り合い、多くの人びとにそれを伝えていきたいと思います。

# 質問4

「村の人がやりたいことと、JVCがやろうとしていることが食い違ったり、意見がぶつかったらどうするの？」

●●●

「まず、お互いが望んでいることや目標を確認することから始めます。それが同じなら、意見が違うことがあっても、たくさん話し合うことでお互いに納得できるはずですよね」

ＪＶＣがやりたいことをそのまま村に持ち込んで実行するわけではありません。まず、村の人たちの望んでいることとＪＶＣの目標が同じかどうか確認することから始まります。それが同じなら、村の人たちとよく話し合いをして、村にはどんな問題があるのか、その改善のために何ができるか、どのようにやったらいいのかを一緒に計画を立てながら進めていくのです。

ＪＶＣの目標は、地球上のすべての人びとが安心して暮らせる社会、環境をつくることです。もちろん日本の環境と、日本が及ぼす他国、他地域への影響を改善することも含んでいます。では、村の人が望んでいることとは何でしょうか？　国も言葉も文化も違う私たちにそれが理解できるのでしょうか？　私はできると思います。そんなに難しいことではないはずです。「安心できる幸せな生活」を望むのは、世界の誰も同じでしょう。

ただ、そのような生活は、お金や車や電気製品などの物質的なものを手に入れることで実現できることなのか、社会のしくみを変え、自然を守り、差別のない新しい人間関係をつくることなどによって実現できることなのか、村の人自身も気付いていないことがあります。たとえＪＶＣの関わる地域の村の人が望んだことでも、それが他の地域や社会、または将来に悪影響を及ぼすことであるようなら、ＪＶＣはそれを支援するわけにはいきません。例えば、森の木をたくさん切ってお金をもうけたいとか、川に大きなダムをつくって電気をもらいたいとかいうような場合です。その場合は、もう一度話し合って、他への悪影響がなく、村の人が置かれている状況が改善されるような方法を一緒に考えます。

目標が同じだと確認し、一緒に計画すればもう押し付けにならない、とも言えません。ＪＶＣは「プロジェクト」として行なっていることでも、村の人にとっては生活そのものです。ですから、進め具合は村の人の生活ペースに合わせることが大切です。

お互いに同じ目標をしっかりと理解していれば、たとえ意見が食い違うことがあっても、充分な話し合いをすることによってお互いが納得する方法が見つかるはずです。「村の人」、「ＪＶＣ」と分かれずに、同じ目標に向かって活動している仲間という気持ちで、何でも話し合いながら進められれば理想的ですね。


答えた人

森本 薫子（もりもと かおる）
タイ事務所・
インターンシップ・プログラム担当

東京での（OLと呼べるほど優雅ではなかったが）3年間の会社員生活の後、JVCタイの「タイの農村で学ぶインターンシップ・プログラム」に参加（99～00年）し、人生が一転！　ノンジョク自然農園での研修、派遣先チェンマイでの出会い、学びによって、冷たい水をかぶって目が覚めたように、今まで見えていなかったことが見えてきた。インターン修了後はJVCタイのスタッフとなり、ノンジョク自然農園を拠点としてバンコクのスラムでの住民図書館活動とインターンシップ・プログラムを担当。将来の農的生活の実現と、インターン修了生たちとの新プロジェクトをたくらみ中‼

# 質問5

「だけど、言葉も習慣も違う外国の村で、どうやって村の人と仲良くなるの？　嫌いな食べ物が出された時とかはどうするの？　病気は恐くないの？」

「仲良くなるには、言葉だけじゃなくて、表情や気持ちも大事。本当にダメな食べ物なら、素直にそう伝える！　病気には、下調べ、ちゃんとした食事、それと…」

私がいる南アフリカ共和国のカラという町では、黒人の人びとはコサ語を使っています。私はこれがなかなか上達せず、苦労しています。でも、私たちは言葉だけでコミュニケーションをとっているわけではありません。表情や、聞こうとする姿勢からも、相手と気持ちが通じることはよくあるのです。もう一つ大事なことは、「お手伝い」です。サツマイモの皮をむいているお母さんも、畑で収穫したトウモロコシを運んでいるおじさんも、私が「手伝わせて」と言う（あるいは態度で表わす）とても喜んでくれるし、一緒に過ごすことができるようになります。子どもたちがやってきて私の掃除を手伝ってくれる時も同じです。人びとと一緒に過ごしていれば、言葉も少しずつわかってくるでしょう。

カラの町のように言葉があまり通じないところでは、出された食べ物を村の人たちと一緒に食べることができるかどうかは、仲良くなるときの重要なポイントの一つです。こちらでは、朝ごはんに、白トウモロコシの粉を練って蒸してポロポロにしたものに、すっぱくした牛乳をかけて食べることが多いのですが、でも実は、私はこれが大の苦手。無理せずに食べられる分だけを食べるようにしています。村の人たちの好意を受け入れられるよう、まずは食べてみる努力からはじめたのです。そうはいっても、飲めないお酒を勧められたときばかりは、「ごめんなさい、私お酒が飲めないんです」と素直に伝えています。

言葉ばかりがコミュニケーションではないように、食べ物ばかりが仲良くなる手段でもありません。お酒が好きな人は好きな人なりに、お酒が飲めない人は飲めないなりに、自分ができること、得意なことを探してゆけば、村の人たちと仲良くなる方法はいくらでも見つかるのではないでしょうか。

それから、病気のことは、確かに私も心配でした。だから、どんな病気があるのか、どうしたら予防できるのかを出発前にしっかりと調べました。南アフリカについてからは、健康に過ごせるようにごはんをきちんと食べ、そして友達をつくりました。病気になることよりも、病気になった時に一人ぼっちになることの方が、実は大変なことかもしれません。

これが苦手です…

答えた人

小林（こばやし） 恭恵（やすえ）

南アフリカ事務所・農村開発担当


学生時代、フィリピンの農村で出会った人びとの輝きが忘れられず、開発にたずさわることを決意。2度目に挑戦した青年海外協力隊の面接で、「あなたのような人はアフリカがいいんじゃない」と（なぜか）言われて以来、縁あってザンビア、南アフリカとアフリカの農村で生活を続けている。大学院休学中の身でありながら、現在、主夫随伴（ずいはん）（！）の赴任2年目。将来、千葉県の山奥に、山菜と水仙がいっぱいのバックパッカー宿を開くことが夢。

# ヨルダン発・イラク支援活動の現場より

イラク現地調整員（在ヨルダン）
原 文次郎

■フセイン像の跡に建てられた「平和の像」

## 中東からの報告

### ■治安の改善は見られない

イラク支援活動は、日本人を含む外国人の人質事件の多発した四月中旬にバグダッドを出て隣国ヨルダンのアンマンに移動して以来、ここを拠点にして活動を続けています。七月中旬の時点でも、六月末のイラクの主権委譲という節目を過ぎてもなお、治安情勢の改善が見られないという判断から、ヨルダンに滞在中です。

さて、隣国に滞在中でも、支援は継続しています。バグダッドの病院を中心にして、イラクの小児ガン・白血病の治療に必要な薬品や機材の寄付を昨年から続けていますが、これまでに築いてきたネットワークを通して、五月以降も、首都バグダッドに限らず、北部のモスルや、南部のバスラなどの都市にある病院へも、輸送業者を使うなどして、支援の薬品や機材を届けています。これらイラク全土への輸送ルートの途中では、今なお武力衝突が続く地域がありますが、それらの地域を迂回（うかい）する形でルートを確保しています。

今なお散発的に衝突が続くイラクではありますが、六月末に実施された主権委譲によって、少しずつでも前向きな変化が生まれています。バグダッド在住のパレスチナ人で、JVCも運転手としてお世話になったアブ・サイード氏の報告によると、七月になってから、バグダッドの街頭では警官の姿が前にも増して多く見られ、強盗やその他の金銭目的の犯罪は減り、前より街中は安全になったとのことです。

それでは、イラクの今後は良くなると期待して良いのでしょうか。ヨルダンで大学病院に勤務するイラク人のフィラース医師は、現実はそれほど単純ではないと言います。楽観的にも悲観的にもなれない、そして、独裁のサダム政権が倒されて、良い方向への変化のきっかけとなったのは評価できるけれども、実際に政権が倒されてみて、それによってもたらされた良いことというのは少ないと言います。せいぜい自分の思っていることを自由に発言できるようになったことぐらいかな、というのが彼の意見です。

### ■産みの苦しみのなかにも希望を見いだす

それでも、将来についてはわずかな期待もあります。「しばらくの間は混乱があると思う。けれども、言いたいことを言える体制になったのだから、今後しばらくは、自分たちの意向をどれだけ政府がいかしてくれるかを見守る必要がある。今のイラク暫定政権の評価はその後だ」と彼は言います。

一方で、イラクで取材をしたジャーナリストの話では、武力衝突の舞台とされる都市でも、住民の多くは犠牲を生むだけの武力衝突に飽き飽きしていて、これ以上の衝突は避けたいという気持ちが強いとのことです。

今後のイラク情勢については、楽観的にも悲観的にもなれない、しかし、とにかく期待を持って見守るしかない――。支援を続けている私もそう思います。支援先の病院のマージン医師の言葉が思い出されます。

「サダム時代は希望がなかった。今は希望が見えるだけまだましだ。ただ、その希望への道のりの長さも見えてしまってつらいこともある」

まだしばらく、イラクではこの産みの苦しみの時期が続きます。しかし、希望を持ったその気持ちに寄り添って支援を続けていこうと思います。

# 医療支援を通して見たアフガニスタン

アフガニスタン現地調整員
本間 一

■産婆研修はイラストや人形を使って行なわれる

## ■埋まらない地域格差

アフガニスタンでは、米軍の空爆に端を発したタリバン政権の崩壊から、早くも三年近くが経過した。当時は国連や日本政府などが、緊急支援の名目で莫大（ばくだい）な援助を医療分野でも開始したはずだが、首都カブールや地方の都市で充分な設備をもつ病院で診察を受け無料で薬がもらえる人びとがいる一方、農村部の家庭や遊牧民はいまだに診療所もなく海外援助の恩恵を受けられない。同じアフガン人でありながらこのような格差が生じるのは、海外からの援助の不均衡によるところが大きい。

カルザイ移行政権は中央集権化を打ち出している。海外からの医療支援も、国の保健省が一元管理している。保健省の統率のもと、一つの（または隣接する）郡全体を、一つのＮＧＯに担当させるしくみだ。これは確かにＮＧＯ間の重複が防げるという面では利点はある。このしくみを世界銀行やヨーロッパ委員会も後押ししている。

しかしここには大きな問題がある。省庁幹部とＮＧＯの依存関係がおこり、それが支援の不均衡を招いてしまうのだ。ＮＧＯの中には、省庁の幹部に給料以上の「協力手当」を支給する団体が多い。幹部を意のままに動かすことによって、それらのＮＧＯは立地などの条件のよい地域を担当する。交通が不便だったり、治安が不安定な地域には入っていかないのだ。この依存関係がある限り、冒頭に述べた都市と地方の格差は今後ますます拡大するだろう。

このような状況の中、ＪＶＣは①医療スタッフの意欲も地域での経験もありながら、外国の医療ＮＧＯが入らないため、器材や薬品が不足して本来の機能が発揮できない保健省管轄の地方クリニック一ヵ所へ、器材や薬局および検査室に必要な医薬品の支援を実施し、②読み書きができないため経験のみに頼り、最新の技術や知識が不足している五地域の伝統産婆六十名を対象に、一年間の研修プログラムを昨年度から開始した。

## ■より中立かつ公平に

クリニックのサミウラ・ハク院長は、「世界保健機関や国連児童基金から大量の器材や薬がアフガニスタンに分配されたが、先日保健省から我々に届いた薬はどれも有効期限ぎりぎりのものばかりだ」と、移行政権の調整機能が働かないことを嘆く。そして、「我々のクリニック支援のために初めて訪れた外国人に危害が及んだら村の一大事だから」と、家に隠し持っていた旧ソ連製ライフル銃を取り出し、自ら一晩私の枕元で夜を明かした。また、ある十二ヵ村の集合評議会議長のファローク氏は、「昨年のＪＶＣ巡回クリニックと今年の産婆研修は、婦女子ばかりでなく家庭で男性の保健意識を目覚めさせた。過去三ヵ月、死産は報告されていない」と長老十二名の署名入り感謝状をＪＶＣに届けてくれた。

アフガニスタンの平均寿命は国連統計では今でも四十代前半と推定されている。主な要因は、幼児の四人に一人が地雷の被害やマラリアなどの病気のために五歳までに命を奪われることにある。アフガニスタンの将来を担う子どもの人権を守る第一歩として、地域格差をなくすべく中立や公正の立場で住民に保健医療の手を差し伸べるのは、同じアジアの同胞として、また不幸な先の大戦を経て近代国家に生まれ変わった日本に住む我々の、国際社会に向けた当然の責務ではないだろうか。

# パレスチナ・ラファ緊急支援報告

パレスチナ現地調整員
藤屋 リカ

■支援で届いた牛乳パックを手にする子ども
（写真提供：イスラミック・リリーフ）

## ■ラファでの惨劇

五月、ガザ地区南部ラファでイスラエル兵五人が殺害されたことをきっかけに、イスラエル軍はラファに対して大規模な軍事侵攻を開始しました。エジプトとの国境近くの家屋を、中に人がいるにもかかわらず破壊するなど、この侵攻は八日間続きました。この間、一部では家から一歩も出られないほどの厳しい外出禁止令が出され、洗濯物を取りに屋上に出た子どもが撃たれて死亡したり、この侵攻の即時停止を求めるパレスチナ人のデモ隊にイスラエル軍が発砲して子どもを含む十人以上が死亡するという事件も起こりました。この侵攻で、六十人以上のパレスチナ人が死亡しました。UNRWA（国連パレスチナ難民救済機関）によると、ラファではこの五月だけで約三百の建物が破壊され、約三千八百人が家を失いました。

七五％の人が貧困ラインといわれる一日二ドル以下での生活を強いられている中での軍事侵攻だったので、その後のラファの人びとの生活は困難を極めました。この事態を受け、JVCは食糧支援を中心とした緊急支援を開始しました。

## ■栄養面での支援を実施

第一弾として、五月二十五、二十七日に、イギリスのNGOで、食糧やマットレス・毛布などの緊急物資支援を行なったIR（イスラミック・リリーフ）と、米国のNGOであるANERAと共に、家を失った約四百三十の家族に牛乳を支援しました。この牛乳は、西岸地区のナブルスで生産されている長期保存可能なものです。一家族に十日間分を目安に、全部で約三万一千パック（一パック＝二五〇㎖）を配布しました。うち約四分の一がJVCからの支援でした。

また、ラファは元々生活が厳しい状況にあったため、特に困窮している人びとへの支援のニーズも高いです。そこで第二弾として、栄養失調児を抱える家庭を対象に、子どもの栄養を専門とするパレスチナのNGOである「人間の大地」のラファクリニックを通して、ANERA、IRと共同で牛乳と栄養価の高いビスケットを支援しました。六月六日、牛乳約四千五百パック、ビスケット約二百八十キロが同クリニックに届き、約二週間にわたって支援物資を配布しました。JVCは支援全体の約四分の一を支援しました。

今回のラファでの破壊は激しく、現地NGOからの報告と、現場の状況を実際に見たうえでの判断から、六～九月の四ヵ月間、支援を継続することに決定しました。第三弾として、同クリニックを通して深刻な栄養失調児を抱える家庭を対象に、安価で栄養価の高い食糧セットの支援を開始しました。また、「人間の大地」が作成した安価で作れて栄養価の高い料理のレシピも配ります。七月からは同クリニックに看護師を一人配置し、母親に対しての栄養・保健指導、相談などの心理的サポートも合わせて行なっています。

## ■事態の原因を問う活動も

実際の緊急支援と同時に、なぜこのような緊急支援が必要な事態が起こってしまうのかを考えなければなりません。パレスチナで人道支援を行なうNGOの連合体であるA－DAは、イスラエル軍による軍事攻撃と家屋破壊の即時停止を求める声明を侵攻の直後に発表、A－DAのメンバーであるJVCもこれに署名し、人びとの人権が守られるように働きかけています。

## スタッフのひとりごと

# アディオス、カラムーチョ！

カンボジア事務所代表　米倉 雪子

イラスト／かじの 倫子

9年間カンボジア事務所の会計を一手に引き受けていたトラさんが、新年早々、結婚してあと1ヵ月で引退すると宣言。おめでとう！と祝福しつつ、私は危機感を覚えた。信頼できる後任者をすぐ探さねば。

公募をすると、150通ほど応募があった。即戦力になるベテランということで、大学で会計・経営学専攻、会計兼総務としてUNTACで2年、企業で3年、国際NGOで5年という経歴の持ち主の仮採用が決まり、ほっとした。彼の履歴書の写真がチョビヒゲで笑顔、オシャレな縦じまストライプのシャツを着ていたことから、日本人の間では彼を「カラムーチョ」と呼ぶようになった。

ところが、引継ぎが始まったものの、これが一向に進まない。というのも、初日からトラさんに対して「それは君のやり方だ。こうした方がいいのでは？」と批判するなど、学ぶ姿勢に欠けるのだ。時が経つにつれ、身のこなしは軽快だが、領収書の金額を書き間違える、会計の基本である地道な計算が苦手、スタッフの給料袋を渡し間違えるなど凡ミスも目立ってきた。そうこうしているうちに、トラさんの離任の日は来てしまった。

その後の毎日、彼の会計記録と領収書の確認を私がするはめになった。これでは自分でやった方が早い。覚悟を決め、彼の本採用はせず、採用試験をやりなおし、企業会計をしていた若手を採用し直すことにした。

その後、新人はすぐに仕事を覚え、テキパキとこなしている。活動の成否は、人材にかかっている。人選は難しいが、適材適所。カラムーチョも苦手な会計より軽快なテンポをいかせる天職があるような気がする。さらば、カラムーチョ！

## みるよむきく

# 『イラク「人質」事件と自己責任論』

佐藤真紀・伊藤和子編　大月書店　1200円＋税

『人質事件が起こったとき、「自作自演」という言葉が出てきて、びっくりした。週刊誌では、理由のひとつに高遠さんの活動映像がすぐTVに流れた、手回しがよすぎるというんですね。あの映像は私が撮影したものだったのです。夜中にNHKが取りに来た。今井君も高遠さんもよく知っていたから、マスコミの伝えるうそくさい話はきちんと否定しておく必要がありました。それから、やはり私はNGOの立場から、NGOに関して、非国民とか、反政府とかそういうものじゃないんだというのをしっかりと言わなきゃいけなかった。

四月下旬に今井君が戻ってきたら一緒にイラクの報告会をやろうと場所を押さえていましたが、無事に帰ってきたものの人前に出られるような状態じゃなかった。そこで励ます会をやってビデオメッセージを届けることになった。十人くらい関係のあった人がメッセージを言っていったのですが、それが良かった。いろんな人が、本当に一生懸命に力を合わせたんだということがよくわかった。このことを絶対記録に残して今後につなげていこう、自己責任論の反論をしよう、三人を元気付けるような本を作ろう、ということになった。

ただ、それだけで終わっちゃいけないのはやっぱりイラクなんですね。みんなイラクの人たちのためにやってきたのだから、彼らが殺されないように何とかしなくてはいけない。

日本の問題で浮かれすぎ、騒ぎすぎたというか、イラクのことを殆ど考えてなかったんじゃないか。それでここまできてしまった。この事件で目が覚めて、みんなそれぞれの立場で、学んだことがたくさんあるはずです。それを、ちゃんと実践していくためにこの本が役立てばと思います』

（編者／イラク事業担当　佐藤 真紀）

# 《開発協力》

## タイ THAILAND

**地場の市場づくり**

タイ東北部コンケンで、地域循環の流通システムをつくり出すために、地場の市場づくりを進めている。ポンの町の直売市場が六月二十一日に新規オープン。これまではまだ化学肥料を使って野菜をつくっている人も販売できたが、今回からは規則を改訂し、有機農作物だけが販売されるようになった。

現在、市場委員会は有機農業の会員（農民）を百三十人と認定した。昨年五月時点で二十人だった有機農業の会員が、この一年余りで六倍以上に増えたことになる。地場の市場が刺激となって、有機農業を行なう農家が着実に広がっていることを物語っている。（倉川）

**農村で学ぶインターンシップ**

NGO活動や開発に興味がある人を対象に、タイの農村で学ぶ機会を提供している。九期生四名のうち、二名がJVCタイの「地場の市場」プロジェクトの活動地である村に一ヵ月滞在する。一名は、「地場の市場」の会員（農民）の家に滞在し、生産者の生活を学ぶ。もう一名は、市場委員会のメンバーの家に滞在し、「市場」の運営を学ぶ。このプロジェクトがインターンの学びの機会としても貴重な場となっている。（森本）

## カンボジア CAMBODIA

**持続的農業と農村開発（SARD）**

安全な水や食糧の確保を目指して、九四年から活動を行なっている。活動地では昨年に続き雨が少なく、七月に入っても田植えが進んでおらず、不作が心配される。新規活動地を選定するため、コンポンスプー県、コンポントム県を視察した。街から離れている地域では活動するNGOも少なく、村の人たちの生活状況は厳しいようであった。（山﨑）

**資料・情報センター（TRC）**

持続的農業や農村開発に従事する人びとに資料や情報を提供するために九五年から運営。新規利用者は学生を中心に月平均二十人増えており、秋から始まる新学期には図書室利用説明会を予定している。（山﨑）

**技術学校**

自動車修理と溶接を学ぶ職業訓練校・整備工場。今年は広島県がJICAと連携し、プノンペン校職員一名が半年の広島県内技術研修に六月に出発した。また、広島県から技術者を八月にカンボジアに二週間派遣し、同校校長らが秋に広島に短期研修に訪れる予定。

カンボジア政府から同校の移転を要請されており、選択肢として移転回避、市内中心部への移転、湿地地域への移転の場合には補償条件の整備と保証、を交渉中。

シアヌークビル校は経営改善努力を続けた。（米倉）

**調査研究・政策提言**

地元の村人がつくる漁業共同体（漁業組合）によるトンレサップ湖の自然資源管理を促進。コンポンチュナン県とバッタンバン県での現状調査報告書と漁業共同体運営に関する教本が完成。アジア森林ネットワーク主催のフィリピンでの共有林管理研修に六月に参加。

土地調査は、土地登記が成功して土地紛争が激減した事例調査をコンポントム県で実施。

ラタナキリ県先住少数民族の共有林管理を支援するNGOであるNTFPの暫定理事会に参加し、運営体制改革、常務理事会創設を手伝った。（米倉）

## ラオス LAOS

**自然農業と農村開発（ビエンチャン）**

本プロジェクトの六月末終了に向け、五月末にJVC内部の、六月上旬にはラオス政府との評価会議を実施した。自然農業に取り組む積極的な農家が増えてきていること、回転資金を管理できるようになり、中には独自に発展させている例など、プロジェクトが村の生活に根付いていることが明らかになった。プロジェクト終了後、ビエンチャン連絡事務所を新たに設置した。（名村）

**森林保全と自然農業（カムアン）**

田植えが始まるこの時期、村人に堆肥（たいひ）効果を実感してもらうため、意欲のある農家とともに試験栽培を実施している。また、複合農業普及の一環として、九村で果樹栽培トレーニングと果樹の苗木配布を実施した。

村の共有林が企業との充分な話し合いがないまま伐採される事例が後を絶たない。そこで、六月下旬、カムアン県内の関係各省庁を集めて、問題の解決方法を話し合った。（名村）

## ベトナム VIET NAM

**農村開発（ホアビン）**

〇四年から三年間の延長が決定した本プロジェクトでは、これまで以上に持続的農業と環境保全に関する取り組みを強化するために、環境教育やアヒル水稲同時作など新しい活動に取り組むことになった。また、プロジェクト実施パートナーであるタンラック郡行政スタッフと共に環境保全や持続的農業が必要とされる背景を知り、ベトナムのこれからの農業のあり方を考えるための研修をタイで行なった。参加者はタイの農村の現状や各地で住民と行政、ローカルNGOが取り組んでいる持続的農業やゴミ処理と堆肥づくりを結合させた活動などを知り、非常に刺激を受けていた。（伊能）

**自然資源管理（ソンラ）**

住民による自然資源管理の活動を支援しているコマ村の対象集落で、六月中旬、第二フェーズの開始にあたり、住民との計画会合を実施した。一部集落では、貧困世帯の生計向上のために「ヤギ銀行」の設立が提案されるなど、住民からの積極的なアイデアが出された。（西）

## 南アフリカ SOUTH AFRICA

**農村開発**

村人の自給と農村地域の復興を目指し、〇一年より東ケープ州カラ地区で環境保全型農業の研修と普及を行なっている。

五月から、篤農家が小麦の栽培準備にとりかかった。改良品種の種子が広まっているなかで、地元の気候・天候にあった在来種を保存していくために、メイズや豆の在来種調査を行なっている。（小林）

**子どもの教育支援**

ジョハネスバーグ市郊外のオレンジファーム地区で地域住民が運営するテボホ知的障害児ホームへの支援を行なっている。施設運営への支援とともに、施設内学級の教材づくりやリハビリのためのトレーニングを実施した。（津山）

**HIV／エイズ調査**

南アフリカでは五百万人がHIVに感染していると言われており、大人の五人に一人が感染している計算になる。現在リンポポ州で新規プロジェクトのための調査を実施している。その過程で、ここではまだまだ感染者やその家族は差別や偏見にさらされていること、女性や子どもが最も影響を受けていることなどがわかってきた。八月末まで調査を続ける予定。（蜂須賀）

# 《緊急対応》

## アフガニスタン AFGHANISTAN

**東部地域医療支援**

・地方クリニック支援／カスクナール郡で唯一のクリニックへ、器材の購入や医薬品の補充を行なった。また、JVCのアフガン人医師によるクリニックスタッフの職能向上に向けた指導や、診察室などの改修を開始した。支援開始から五ヵ月、評判を聞いて訪れる患者の数は四割増加した。（本間）

・女性医療従事者養成コース／日本政府の援助で完成した女性研修センターの有効利用を目的に、設備や備品の支援を行なう予定。（本間）

・伝統産婆の職能向上研修／JVCのトレーニングを終え地域で活動中の四十九名の伝統産婆に、三ヵ月ごとのフォローアップを行なう計画が、十月に向けた選挙がらみの治安悪化のため一部でストップしている。今後は支援中のクナール県のクリニックの管轄地域でも、トレーニングを開始する。（本間）

**シギ高等女学校支援**

七割の生徒が屋外での授業を余儀なくされているシギ女子学校の校舎を増設する。五月に着工し七月の段階で基礎工事を完了。建設はJVCの建設チームが独自に行なっている。同時にシャワ郡の教育事務所の工事も請け負っている。（谷山）

**東京事務所**

日本アフガニスタンNGOネットワーク（JANN）を立ち上げ、アフガニスタンで活動するNGOへのアフガン関連情報の提供、NGO相互の意見交換、勉強会の開催等を行なっている。（谷山）

## イラク IRAQ

**医療支援**

主権委譲後もイラク国内の薬品の不足は続いている。JVCは安全面を鑑み、当面イラクの隣国ヨルダンを拠点に支援を行なっているが、今回はバグダッドに加え、バスラ、モスルの病院からも薬品の要請があり、これに応えて薬を無事に届けることができた。（原）

**東京事務所**

イラクの子どもたちが描いた絵の絵画展が、全国各地で開催されている。また、イラクで収録した子どもたちの歌声や街の音に、ボサノバ、アラブ音楽を組み合わせたCDが、音楽家たちの協力を得て完成。絵や音を通してイラクの人びとの思いを日本に伝えるため、様々な企画を実施している。（佐藤）

## パレスチナ PALESTINE

**ラファ緊急支援・延長**

ガザ地区南部ラファでは、五月の家屋やインフラの大規模な破壊により、自治区でも特に深刻だった食糧事情がさらに悪化した。これを受け、緊急食糧支援を九月まで延長することを決定。現地NGO「人間の大地」と協力し、特に栄養失調の深刻な子どもと困窮家庭を対象に豆、ナツメヤシなどの食糧を配給し、栄養失調児の母親たちのケアができる看護師一名を栄養センターに配置した。（田村）

**難民キャンプ子ども文化支援**

ベイトジブリンの文化センターで、JVCが支援する子どもたちのためのサマープログラムが始まった。お絵かきや工作、ダンスなどに加え、普段は行くことができないプールに行くなど、楽しい時間を過ごしてもらうことが目的だ。三年前の侵攻でキャンプが破壊され暗い顔をしていた子どもや、軍に石を投げに行って怪我をした男の子たちが、今では小さな子どもたちの面倒を見る立派なリーダーに育ちつつある。（田村）

## コリア KOREA

**南北コリアと日本のともだち展**

今年で四回目をむかえる『南北コリアと日本のともだち展』が、七月七日より一週間、渋谷の東京都児童会館で開催された。期間中、韓国の子ども十一名が来日し、十一日に会場で開かれたワークショップでは、日本に住む子どもたち約五十名とともに、ゲームを楽しんだり、北朝鮮の「ともだち」に向けてのメッセージを書いたりして交流を深めた。（寺西）

**『北朝鮮の人びとと人道支援』出版**

〇二年度の調査研究活動として進められた「北東アジア地域の平和的共生」をもとにした本『北朝鮮の人びとと人道支援』が出版された。（寺西）

## JVC国際協力カレンダー2005『祈り』販売開始！

写真：野町 和嘉　　1部 1500円(税込)

会員のみなさまには、毎年ご利用いただいているJVC国際協力カレンダー。今年のテーマは『祈り』。アジア・中東・アフリカ…世界各地の「祈りのある風景」12景です。
聖地の山、子どもたちが学ぶ姿、祈る僧侶、教会の壁画…写真家野町和嘉氏ならではの、貴重な写真の数々です。

収益金は活動費に使われます。
イラク：小児ガンの治療薬支援
アフガニスタン：女子学校の増設
ベトナム：家畜へのワクチン

同封のチラシのハガキでお申し込みください。

# 国内ひろば

JVC network

イベント報告

## 第5回 会員総会

6月12日（土）
東京・池袋　ECOとしま

会報誌レイアウト／会員担当　細野 純也

去る六月十二日、第五回会員総会が開催されました。当日は四十五名の会員が出席され、委任状提出も含めて定足数を満たしたことで総会の成立を確認しました。代表の熊岡路矢から挨拶があり、その後に議案の討議に入りました。

**■議案①・○三年度活動報告・決算報告**

まず、事務局長の清水俊弘から、村落開発に関連する活動が中心であるタイ、カンボジア、ラオス、ベトナム、南アフリカにおける活動に関して、そして緊急対応の活動として、パレスチナ、北朝鮮、アフガニスタン、イラクにおける活動を報告しました。

続いて、これらの海外現場の活動を支え、日本国内にフィードバックする国内事業に関する報告も行ないました。

○三年度決算に関しては、支出が収入を三千五百万円ほど上回る結果になりました。支出はほぼ予算どおりでしたが、収入が低かった主な理由として、外務省からの補助金（『NGO支援無償』という新しい制度）の申請が三千万円ほど認められなかったことをあげました。加えて、この制度に関して申請後に結果が判明するまで数ヵ月から一年以上の時間がかかってしまい、そのためにこの申請が認められない場合の対応策が取りづらかったことも理由の一つでした。

報告後の質疑応答では、「課税の関係から、認定NPO法人への申請はどう考えているか」、「予算における『官』からの資金の割合についてどう考えているか」といった質問がありました。認定NPO法人に関しては、今年度中に申請する予定であることを、予算の割合に関しては、明確な基準はないが全体の2割程度と考えているとお答えしました。

**■議案②・○四年度活動計画・予算案**

同じく清水から、今後も村落開発と緊急対応を活動の両輪と位置付けていくこと、政策提言をもうひとつの車輪とすることの説明があり、続いて、○四年度の各国活動計画の包括的な説明がありました。

○四年度予算案に関しては、三億円弱の規模になるとの提示がありました。

その後の質疑応答では、活動計画に関する質問に加えて、「会員拡大に関して、なにか具体案があるか」という質問がありました。事務局からは、来年が設立二十五周年であることもあって地方に出向いていく仕掛けをつくりたいとの提案がありました。また、広報ではメディアをうまく使ってほしい、との意見が、広告代理店や新聞社に勤められている会員の方から出されました。

**■議案③・役員改選**

今井高樹理事の退任にあたり、会員の楢崎知行さんが新理事に承認されました。同時に理事内で互選を行ない、熊岡が引き続き代表理事として留任することも決定しました。

## 募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

### ① JVC募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：**00190-9-27495**
加入者名：**JVC東京事務所**

5月計　**6,133,924円**
6月計　**4,287,233円**

| | 5月 | 6月 |
|---|---|---|
| 無指定 | 346,635円 | 655,728円 |
| タイ | 103,000円 | 3,000円 |
| カンボジア | 12,590円 | 0円 |
| ラオス | 70,000円 | 601,000円 |
| ベトナム | 1,500円 | 0円 |
| 南アフリカ | 0円 | 25,000円 |
| パレスチナ | 55,500円 | 1,380,043円 |
| アフガニスタン | 1,709,857円 | 78,000円 |
| 北朝鮮 | 162,590円 | 12,000円 |
| イラク | 3,672,252円 | 1,532,462円 |

### ②犬養道子「みどり一本」募金

この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：**00100-8-212497**
加入者名：**犬養道子「みどり一本」**

5月計　**126,000円／32件**
6月計　**372,000円／40件**

### ③ JVCマンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としやクレジットカードを利用する手軽な募金方法です。

5月計　**110,000円／80件**
6月計　**119,000円／83件**

## 編集後記

編集企画は生きものみたいなもので常に変化します。今号の場合、夏休みということで、NGOに関する子どもの質問にわかりやすく答えるという企画で始まりました。

が、すぐにそれでは面白くないな、ということになり、JVCの若手スタッフに、公式回答ではない、日ごろの活動の中で感じていることをいきいきと書いてもらうことに変更しました。そして、プロフィールでも彼らの挫折や夢を語ってもらおう、ということに。いかがでしょうか。（和）

# インターン紹介

東京事務所インターン、前号に引き続き「夏組」をご紹介します。

**小久保 啓（こくぼ ひろし）　調査研究インターン**

大学一年からフィリピン植林ワークキャンプに参加してきました。そこで、「支援すること」とはどのようなことか、搾取されることのない平和な世界をつくるためにはどうしたらいいのかと考え、それを実践しているJVCで学びたいと思っています。

国際協力、ボランティア、NPO立ち上げ、自主メールマガジン発行、イベント・講演会の主催など、学生なりにさまざまな活動をしてきた中で、JVCを知りました。これから一年間、調査研究担当の高橋さんにしっかりついていきたいと思います。

**塙 真智子（はなわ まちこ）　カレンダーインターン**

私がもともと日本以外の「世界」というものに関心を持ったのは、台湾とのスポーツ交流を通じて、過去の歴史に気付いたことがきっかけでした。それ以降、「世界」との関わりに関心を持ちながら、ここ2年くらい少しずつですがNGO活動に参加し始めました。

そして、この度五年間の会社員生活に一旦ピリオドを打ち、JVCでインターンを始めることになりました。これまで、JVCとはNGO非戦ネットやWorld Peace Now実行委員会を通じて接点があったのですが、その過程で、JVCの毅然とした態度に好感をもち、その運営を見てみたいと思っていました。それがJVCのインターンに興味を持ったきっかけです。

今年は昨年度よりもカレンダーの発行部数を増やす予定ですので、元同僚などにもカレンダーを購入してもらえるよう、頑張ります！

**吉田 璃子（よしだ りこ）　会員担当インターン**

NGOや国際協力に参加してみたいけど、特別な技術や経験がない学生の私に何ができるだろう…と思っていた矢先にこのインターン募集を知り、絶好の機会だと思い応募しました。

活動を始めて一ヵ月が経ち、やっと朝の満員電車にも慣れてきました。事務所では毎日学ぶことがたくさんあり、失敗もあり、まさにTrial & Errorの日々です。会員インターンという立場を通じて、いろんな地域・世代の人たちがJVCに興味を持ち、携われるようになるにはどうしたらいいかということや、今後ますます活躍が期待されているNGOの今後のあり方について考えていきたいです。

「やりたいことはなんでもやる！」が個人的な今年の抱負なので、大学生活もアルバイトもインターンも夏休みも、後悔しないように精一杯楽しみたいです。

Trial & Error（試行錯誤）二百四十号

一九八二年八月十六日 第三種郵便物認可
二〇〇四年八月二十日発行（通巻二百四十号・隔月二十日発行）

発行人＝熊岡路矢
編集人＝大野和興・清水俊弘
編集スタッフ＝広瀬哲子
レイアウト＝細野純也

発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇-八六〇五 東京都台東区東上野一-二〇-六丸幸ビル六階
電話［〇三］三八三四-二三八八 FAX［〇三］三八三五-〇五一九

印刷＝ベスト・プリンティング

定価＝五〇〇円（税込）

# 暮らしを彩る道具

LIFEWORK ITEMS

69

South Africa

## 踊る鈴

**厚めのビニール袋を再利用して三角錐の形にし、なかに小石を入れて音が鳴るようにしたもの。外側の材料としては、蓑虫（みのむし）の殻などが使われることもある。お祭りなどで踊るときに、音を出すために使う。（南アフリカ・リンポポ州にて撮影）**

JVC Japan International Volunteer Center

**日本国際ボランティアセンター**（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

### ■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

◎一般会員　10,000円
◎学生会員　5,000円
◎団体会員　30,000円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当へ。
hosono@jca.apc.org

会員数（7月26日現在）合計 1502人
（正会員 632人　賛助会員 870人）

### ■オリエンテーション(説明会)へ起こしください。

JVCの活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。（無料。予約不要です）

第1月曜日　午後7：00－8：30
第2・第4土曜日　午後2：00－3：30
※会場はJVC東京事務所です。

### ■ E-mail

jvc@jca.apc.org

### ■ URL（ホームページ）

http://www1.jca.apc.org/jvc/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。